

韓国薬学研修報告 ～東國大学韓方病院見学～

赤井 奈保子 薬学部4年 11A003
羽根田 亜紀 薬学部4年 11A127

韓国研修二日目の8月22日に東國大学韓方病院を Sungwon Kim さんに案内してもらい、専門の薬剤師の先生から韓方調剤について教えていただいた。(図1)

韓方医学は中国から伝わり、韓国で独自に発達した伝統的な医学であることを学んだ。我々日本人の知る「漢方薬」が韓国では「韓方薬」と呼ばれ、韓国独自の医学として研究され進化してきたため、このように呼び名が変わり韓国独特の医学として確立したことを知り得た。中国の漢方薬を基本としていることは変わらないが、日本の漢方薬とはまた異なった医学であることが分かった。韓国の体質と状態に合わせた思考の基に成り立っている医学と考えられる。そのため韓国では医療が西洋と東洋とに区別され、薬剤師とは別に資格を要する韓方専門薬剤師や韓方専門医師という役職が存在する。



図1 韓方の説明風景

調剤室について

韓方病院では大量の生薬は冷蔵庫に保管しており、頻繁に使用される少量の生薬は図2のように棚にそれぞれ分別されて収納されている。処方箋によって生薬を棚から少しずつ取り出し、量を測定し必要な分を袋に詰めて包装している。



図2 生薬保管棚

韓方薬には動物・植物・鉱物とありほとんどが植物性の薬剤であるが、中には鹿の角などが用いられることもある。これは10gなんと2000円もする希少価値のある生薬である。鹿の角は産毛の生えているものでないと効果がなく、若い鹿の角が貴重で先端の部位の方に成分が多く含まれていることを知った。見学中、シナモンである桂皮を試食させていただいた。ものすごく固く噛み砕くのが困難であったが、実習で使うものと違い味が濃く匂いも新鮮な甘い香りがした。甘味のある味わいの後にとてつもなく強烈な辛み成分に似たような刺激を感じ、思わず顔をしかめずにはいられないほどだった。しかし数分後には水も飲むことなく、刺激も辛みも消え口の中がさっぱりしていた。



韓方病院について

韓国の医療では、西洋専門の医者と韓方専門の医療に分かれて診療しており、韓方専門の医師に診療を受けた患者さんが処方箋を受けて、韓方専門の調剤室で調剤する。

韓方は8科に分かれており、精神科、産婦人科、リハビリ科、鍼灸科、小児科、気をみる科、耳鼻咽喉科、眼科がある。

入院患者さんの医師から薬剤師への処方箋の伝達は、コンピュータのデータの共有より管理されており、データが医師のコンピュータから薬剤部のコンピュータに送られることで伝達されていた。

検査室では、肝、心、脾、肺、腎の5臓についての虚実を見る機器や、血圧測定器と同じ原理で血流の流れを見ることで動脈硬化の早期発見をする動脈硬化検査器などの機器がある。

針治療室では、韓方の歴史より気の流れを分析し、身体の決められた位置に正確に針を刺すことで治療を行うという方法が用いられていた。

この方法は、医師の指診より患者の様態を聞きながら行っていた。

私たちが特別に治療していただいた時は、針を4本用いて行い、治療直後は少し赤い斑点が残っていたものの、治療効果は即時的であった。

この針は、一回の治療ごとに使い捨てされていた。

その他にも、生薬の木を細かくして発酵させたものが敷き詰められた砂風呂のような部屋があり、この中に入ることによって解毒治療をするということもしている。

この解毒治療は、肥満治療に用いられったり、ガン治療の1つとしても用いられており、ガン治療では30分～1時間ほど中に入ることによって治療している。(図3)

他にも韓方医療では、ハチ毒を使って治療する方法なども用いられている。



図3 解毒治療

調剤について

韓方調剤は医師から処方せんをPCなどでダウンロードし、患者の体調や症状に合わせて様々な生薬成分の薬剤を選び混合することで、個々の患者に合わせた処方となされている。主に左図の薬湯器によって生薬を加熱して蒸し、高圧水蒸気によって成分を抽出する。一般に、外来患者用として大量に成分を取り出す際はこの機械が使用される。抽出後、水分を多く含んだままでは腐りやすいため、抽出した成分を乾燥させ圧縮し丸めて3cmほどの塊にして保存される。



図4 大きい薬湯器

また、右図のような小さい薬湯器は入院患者への院内処方として必要分量だけ絞り出す際に使用される。1つ2000円程度とのことで、案外低価格であった。

韓方調剤の最大の特徴は個々の患者へのオーダーメイド処方であり、病気になる前の状態から治療が進められ、予防を目的としている。心と体のバランスを均等にすべく、患者の体調と状態を基に韓方処方となされていることを学んだ。



図5 小さい薬湯器

感想

日本とは違い、西洋だけではなく東洋をも専門職とした韓医学の職場を目の当たりにし、生薬への興味が一層深まった。個人的に好きな韓国ドラマ『宮廷女官チャングムの誓い』のような現場が、今もなお存在していることに私の胸は高鳴り思わず興奮してしまった。また、日本では病気になるからの治療がメインであるのに対して、気分が芳しくないなどのわずかな気の変化から治療を開始する、身近な医療が韓国では日常的となっていることに驚いた。韓国の薬剤師がただの薬の調合する人と思われないのは、民間人も駆け込み相談しやすい形となっていることが最大の理由ではないかと感じた。いわゆる小さな医師のような存在で一目置かれている。日本ではそのような専門薬剤師という役職はないが、些細なことから変化を見極め、改善する手助けができる薬剤師に私もなりたいたと改めて強く思った。

韓法の調剤室では、生薬独特の匂いが広がっており、原料となる生薬は、日本でも使われているような生薬が見られたが、調剤方法は日本の病院でも見られないような薬湯器や、抽出方法があり、とても良い勉強になったと思う。

針治療は、個人医院として多々見られるが、木くずを発酵させた解毒治療はガン治療にも用いられているということを知り、日本でも用いるべき技術ではないかと考えた。